

「真実の宗教」(十三)

—— 私にとって報恩とは ——

櫟 暁 講 述

〈資料〉

「弥陀の名号となえつつ 信心まことにうるひとは 憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもいあり」

（『浄土和讃』 『聖典』 四七八頁）

「弘誓のちからをかぶらずは いずれのときにか娑婆をいでん 仏恩ふかくおもいつつ つねに 弥陀を念ずべし」

（『高僧和讃』 『聖典』 四九七頁）

一八〇 一 蓮如上人、仰せられ候う。「信のうえは、とうとく思いて申す念仏も、また、ふと申す念仏も、仏恩に備わるなり。他宗には、親のため、また、何のため、なにとて、念仏をつかうなり。聖人の御流には、弥陀をたのむが念仏なり。そのうえの称名は、なにともあれ、仏恩になるものなり」と、仰せられ候う云々

（『蓮如上人御一代記聞書』 『聖典』 八八六頁）

一四 一 仰せに、「弥陀をたのみて御たすけを決定して、御たすけのありがたさよとよろこぶころあれば、そのうれしさに念仏もうすばかりなり。すなわち仏恩報謝なり。」

（『蓮如上人御一代記聞書』 『聖典』 八五七頁）

— 報恩講をおつとめする意義 —

宗祖親鸞聖人のご先祖は藤原氏であり、聖人は後長岡の大臣と云われた内磨公の末孫、日野有範の子であります。

また聖人は、我々末代の凡夫に対し本願念仏を教えるため此の世に現れた阿弥陀如来の化身とか、中国浄土教の祖である曇鸞大師の生まれ変わりとか云われています。

このような（世に稀な素晴らしい）方でありますので早くも九才の時、慈円僧正（慈鎮和尚）の弟子として得度式を受けて「範宴」という法名を付与され、天台宗の僧侶となりました。それから比叡山の横川の源信僧都の教えの伝統の中で修行し、天台の学問を極められました。

ところが二十九才のとき、元祖法然上人の本願念仏の教えに会い、上人の優れた弟子となつて真の大乗仏教としての浄土真宗を身にただかれ、念仏一つで宗教的自覚者となる道を明らかに示されました。そして私達のような家庭生活・職業生活の中で苦悩している愚かな者に、真実の如来の光明の世界（真実報土）に生まれるようすすめられました。

云うまでもなく十一月二十八日は、親鸞聖人のご命日であり、昔から真宗念仏者は皆忘れずに毎年御正忌報恩講をおつとめし続けて来ております。

だから当流本願寺教団に真宗門徒として加入し、他力の信心をえようとしていながら、聖人の御恩を報謝しようをする志のない者は、まったく枯れ木や岩石のようなもので、聖人と心の響き合いのない名ばかりの門徒であります。

聖人の恩徳はなにものにも比較できない極めて高く深く大きなおめぐみであり、この大恩を報謝する心を失ってしまったては、真宗門徒として目覚めて生きる意味がありません。

このような深いわけがあつて、毎年の旧例として七日間、特別の莊嚴しょうじんを整えて儀式を行い、報恩の為に最高のお勤めをいたします。この七日間の報恩講には、全国各地から必ず門徒が参集してこの御法事を厳肅におつとめするならわしが今日までずっと続いています。

しかし、安心（あんじん）がまだはつきりしていない者には、御恩報謝の心が徹底する道理がありません。未安心（みあんじん）の者は、この報恩講七日間に、

仏法の信心とはどういう信心なのか、

他力の信心とは、自己自身にとってどういう目覚めなのか、

本願念仏のはたらきでどのように自己自身が変革されるのか、

自分は果たして信心がえられているのか、

などをよく尋ね、よく聴聞して、法による目覚めが確実になることが何より大事であります。そして眞実信心が間違ひなく定まったとき、はじめて宗祖親鸞聖人の御恩に報いることが出来るの

であります。

悲しいことですが、私達は聖人がおなくなりになってから百年以上もあとに生まれたので、直接聖人にお目にかかってみ教えを聞くことはできません。しかし残されたお言葉によつて私達が多かたつてゆく道理としての教・行・信・証の意義を我が身の上にはつきりいただくことが出来ることは極めて尊く有り難いことであります。

しかしこのことを今日の宗門全体の問題として考えたとき、聖人が「教行信証」を著作して私達に示された浄土真宗と云う教えを実践しようと志す多くの人々の中で、眞実信心をえた人は極めて数少ないのであります。

いたずらに他人の批判を気にしながら、義理や名譽の為に報恩講に参詣して、いかにも報恩謝徳の意味を知っているかのようにふるまつていても、念仏申す一念（ひとおもい）の中に、本願に相応した究極の目覚め（一念歸命の眞実の信心）を体得し得ない人々は、どんなに懇志をはこんでも、この報恩講をおつとめする本当の意味にかなう筈はありません。それはせつかく風呂にはいっても、垢をおとさないで出て来るようなものです。

このようなわけで、この度七日間の報恩講中に、本願他力の意義を十分聞き開いて、ただ念仏一つで眞の目覚めが得られるという道理に身を挙げて納得出来たときに、始めてこの聖人の御正忌の本来の意義にかなうこととなります。

この本来の、報恩の意義にかなう御正忌がつとめられたとき、御正忌が単なる聖人の御命日の法事にとどまらないで、本当の意味の報恩謝徳の御仏事となるのであります。

あなかしこ あなかしこ

(この口語訳は東京教区教化委員会の委嘱により、教区報恩講法話の資料として、元首都圏教化教導櫟暁が作成したもので、国語学的完訳ではありません)

〈法 話〉

本日報恩講の法話を担当させていただく櫟でございます。昨年の記録を皆様方のお手元にお配り下さったようです。

本年お話しします私の資料としまして今から十七年前に私が真宗会館の首都圏教化教導という仕事をさせて頂いていた時に東京教区の教化委員会のご要望がありまして、会館の報恩講の時に拝読する蓮如上人の『御俗姓』の意味を分かりやすく書くようにということで作ったものです。『御俗姓』口語訳と題しておりまして一番下のところを見ていただきますと、(この口語訳は東京教区教化委員会の委嘱により、教区報恩講法話の資料として、元首都圏教化教導櫟暁が作成したもので、国語学的完訳ではありません)と、つまり、『御俗姓』御文の一字一句を間違はなく口語訳し

たというものではございませんので、その蓮如上人の『御俗姓』のお心を私なりに受け取らせていただいたことを書いたものです。それからもうひとつは今日の方の法話の資料として最近作ったものです。

『浄土和讃』は親鸞聖人が七十五歳を過ぎてからお作りになったものです。『和讃』というのは仮名交じりの文章の七五語調で今様の形をとって教えを表してくださった讃歌です。皆様方がいつもお勤めになっている「弥陀成仏のこのかたは」の前にこの一首があります。『浄土和讃』の一番前です。

「弥陀の名号となえつつ 信心まことにうるひとは 憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもいあり」
（『浄土和讃』 『聖典』四七八頁）

ここに報恩という言葉がでてまいります。

それからその下の和讃は『高僧和讃』と申しまして親鸞聖人が龍樹大士から法然上人までの七人の高僧方の教えを仮名交じりの歌で表してくださったものの一首です。

「弘誓のちからをかぶらずは いずれのときにか娑婆をいでん 仏恩ふかくおもいつつ つねに弥陀を念ずべし」
（『高僧和讃』善導讃 『聖典』四九七頁）

それからその下は本願寺八代目住職蓮如上人の言行録です。一生涯の間にお弟子にお話になった記録で、『蓮如上人御一代記聞書』という分かりにくい題ですが、その一八〇条と十四条の二ヶ条をここに引用しております。

一八〇 一 蓮如上人、仰せられ候う。「信のうえは、とうとく思いて申す念仏も、また、ふと申す念仏も、仏恩に備わるなり。他宗には、親のため、また、何のため、なんどとて、念仏をつかうなり。聖人の御流には、弥陀をたのむが念仏なり。そのうえの称名は、なにともあれ、仏恩になるものなり」と、仰せられ候う云々
（『蓮如上人御一代記聞書』 『聖典』 八八六頁）

一四 一 仰せに、「弥陀をたのみて御たすけを決定して、御たすけのありがたさよとよろこぶころあれば、そのうれしさに念仏もうすばかりなり。すなわち仏恩報謝なり。」
（『蓮如上人御一代記聞書』 『聖典』 八五七頁）

これは報恩という意味がここに出ていますからこれを資料としてお話を申し上げてみたいと思います。

まず右側の小さい字で印刷してありますこの『御俗姓』現代語訳、これは聖典の八五一頁の一

行目からです。文明九年に蓮如上人が河内の国（大阪府）出口という所で書かれたもので、急に思い立って書いたものだとは後ろにでています。現代語訳にはそこまで書いていません。『聖典』には後ろの方に書いております。

干也、文明九 十一月初比、俄為報恩謝徳染翰記之者也（文明九年十一月初めの頃、にわかには報恩謝徳の為に筆を染めてこれを記するものなり。）

急に思い立たれて書かれたのだとご自分で書いておられます。私の口語訳を朗読してみます。皆さんも一緒に声を上げて読んで下さい。

— 報恩講をおつとめする意義 —

宗祖親鸞聖人のご先祖は藤原氏であり、聖人は後長岡の大臣といわれた内磨公の末孫、日野有範の子であります。

また聖人は、我々末代の凡夫に対し本願念仏を教えるため此の世に現れた阿弥陀如来の化身とか、中国浄土教の祖である曇鸞大師の生まれ変わりとか云われています。

このような（世に稀な素晴らしい）方でありますので早くも九才の時、慈円僧正（慈鎮和尚）の弟子として得度式を受けて「範宴」という法名を付与され、天台宗の僧侶となりました。それから比叡山の源信僧都の教えの伝統の中で修行し、天台の学問を極められました。

ところが二十九才のとき、元祖法然上人の本願念仏の教えに会い、上人の優れた弟子となつて真の大乗仏教としての浄土真宗を身にいただかれ、念仏一つで宗教的自覚者となる道を明らかに示されました。

これは本文ではもっと難しく書いてあります。

「真宗一流をくみ、専修専念の義をたて、すみやかに凡夫直入の真心をあらわし」と書いてあります。どういう具合に易しく言ったらいいか考えまして、

「真の大乗仏教としての浄土真宗を身にただかれ、念仏一つで宗教的自覚者となる道を明らかに示されました。そして私達のような家庭生活・職業生活の中で苦悩している愚かな者に、真実の如来の光明の世界（真実報土）に生まれるようすすめられました。」

これまでが前序といえますか、報恩講の意義を説かれ始める前に、親鸞聖人がどうして我々の宗祖として仰ぐ親鸞聖人となられたかを簡単に述べてあるところです。

「云うまでもなく十一月二十八日は、（弘長二年、今から七四〇何年前のことですので旧暦「太陰暦」です。）親鸞聖人のご命日であり、昔から真宗念仏者は皆忘れずに毎年御正忌報恩講をおつとめし続けて来ております。」（御正忌とは我々の普通の言葉で云えば祥月命日のことです。）

「だから当流本願寺教団に真宗門徒として加入し、他力の信心をえようとしていながら、聖人の御恩を報謝しようをする志のない者は、まったく枯れ木や岩石のようなもので、聖人と心の響き合いのない名ばかりの門徒であります。」
このところはですね、

「古今の行者、この御正忌を存知せざる輩あるべからず。茲によりて、当流にその名をかけ、

その信心を獲得したらん行者、この御正忌をもって、報謝の志をはこぼざらん行者においては、誠にもって、木石にひとしからんものなり。」

ここのところは少し分かりにくいです。

木石と人間を木や石に喩えているのはおかしいのではないかという反発もございしますが、これは善導大師のお言葉をよりどころにしているのです。「木」とは枯れ木という意味です。報恩講が勤まる時「木」という幹だけを保存していて、それに葉をつけて仏華を作ります。今でも真宗会館では報恩講に立てられます。幹の部分を「ぼく」といいます。枯れた木はどれだけ雨が降っても芽が出ない。枯れたように見えても枯れていない木は雨が降り、季節がめぐって春がくれば芽が出るけれど、枯れた木は芽が出ない。「木」はこういう意味です。「石」はそこらにこらがつている石ではなく、山の頂上にある岩石のことです。山に登って行くと植物の生えているのは八合目くらいまでで、九合目から上は岩石になっている山が多い。そういう岩のことを云ってあります。雨が降っても草木が生えない。そういう意味でそれを喩えにして、この報謝の思いを起すことの出来ない者は、どれだけ仏の慈悲が雨のように降り注いでも芽が出ない者なのだという喩えです。芽が出るといふことは信心の芽が出るといふことです。我々生まれた時からお念仏申し、信心が得られている人は一人もいないのです。ご縁があつて師匠の教えを聞いて今までご縁のな

かった者がお念仏申せるようになり、またお念仏の深い意味に納得し浄土を願う身にしていただいた。これが芽が出るということです。そしてだんだん育っていく。同朋会運動が四十数年も前から実施されていますが、その育成員という役があります。お寺の住職等は育成員です。育成員は出た芽を育てるはたらきをする役割を担っている者という意味です。

それで、

「聖人の御恩を報謝しようとする志のない者は、まったく枯れ木や岩石のようなもので、聖人と心の響き合いのない名ばかりの門徒であります。

聖人の御恩はなにものにも比較できない極めて高く深く大きなおめぐみであり、この大恩を報謝する心を失ってしまったのは、真宗門徒として目覚めて生きる意味がありません。」

親鸞聖人の御恩とはどういう御恩かということは、よく聴かせていただかないと分からないのです。私は子供の頃から報恩講の会座に後ろのほうの障子の脇に座り、お参りをしていました。報恩講のわけが分かったのは曾我量深先生にお会いした後です。戦後です。以前は報恩講は一つの年中行事だと思っていました。十一月二十三日は昔の祭日名では新嘗祭です。報恩講もそういうものだと思っていたが決してそういうものではありません。年中行事として習俗化して行われ

ているという現実はあるが、決して年中行事ではありませんと蓮如上人が云われています。それはいつも新しい心で報恩講をお勤めするということです。我々一人が教えを聴いて自分が済たすかっ
ていく道理を聴かせていただくのは、ひとえに親鸞聖人のお恵みがあるからです。そういう大き
な出来事が私の上に成り立つのは聖人のお恵みであるとはつきり領かせていただく御仏事が報恩
講です。

ここで少し話が変わりますが、今日は大体世界中を見渡しましてもすべて利益共同社会の世の
中です。大きく云えば国と国が貿易をして利益を得る。それから我々一人一人も企業を通して生
産流通サービスという仕事をする事によってお金を儲け、よい暮らしをするという業務をする
のが普通の生き方です。そういう企業社会でありますので、企業ということだけの視点では、宗
教ということには心が向かないのです。この頃TBSと楽天のことがテレビに出ています。私は
経済のことは分かりませんが、普通の考えでは自分の会社の株を買ってくれてありがたいと云わ
なくてはならないのに、TBSは決してありがたいとは云いません。八〇〇億円も金を用意して
TBSの株を買ったのはけしからんという。一言の断りもなく自分の会社の株を二〇%近くも買
い占めてしまったのは自分の会社を乗っ取ろうとしているのだと。そうは云わないまでもそんな
感じですか。そういうことで争いが起こっています。私は経済には縁が薄いので実際にはどうい
う具体的な内容はよく分かりませんが、私が考えるには経営権が奪われるのではないかという心

配で争いがおこっているのだと思うのです。そういうことばかりに熱中していますと自分の人生が何の意味を持っているのかと考えるご縁が薄いわけです。全く無いわけではありませんが、明けても暮れても新聞の株式欄とか経済欄ばかり見て人生の根本義に触れようとしないう傾向が今日強くなって参りました。そういう経済人とか企業人とかでも、協和発酵社長の加藤辯三郎さんのように金子大栄先生に出遇われて真宗の教えを深く聴き込まれ、『在家仏教』という雑誌まで発行しておられ、仏教についての著作もある方もあります。けれどもそういう方は珍しいのです。

私たち一人一人が年に一回報恩講をお勤めするということはどうということかと云いますと、自分が人生の根本義をはっきり教えによつて会得させていただき、その御恩は親鸞聖人のお恵みであるということを確認させて頂く。私は自動車の運転はできませんが少しだけ自動車学校にいったことがあります。習い始めに後ろを見るのにバックミラーで見ないで自分の顔を窓から出してしまうのを確認せよと教えられたことを記憶しております。運転が上手に出来るようになればバックミラーだけで運転してもいいが、まず基本としてうしろを確認し障害がないことが分かって発進することを教えられました。この自動車の喩えで申し上げますと、いつも私は何の意味を持ってこの世に人間の命を受けてきたのかということを確認しないまま、自分の欲望と怒りの心だけで暮らしていくということになると極めて危険であり、人生が空しく過ぎる。そういうことだと思えます。

資料を見ていただきますと。

「弘誓のちからをかぶらずはいずれのときにか娑婆をいでん 仏恩ふかくおもいつつ つねに 弥陀を念ずべし」

これは阿弥陀如来の本願のお力を頂かなければいつまでも泡沫のような今日あって明日を知らぬ社会の中に埋まってしまつて、仏の御恩をまったく知らないで人生の根本義に暗い生活をしながらはならないということです。

「いずれのときにか娑婆をいでん」ということは、娑婆を出るということは苦しいことがいっぱいあつて、それを辛抱して生きている生きかたから開放される精神生活がはつきりするということです。自分にとって都合の悪いことやら自分にとって情けないことがいっぱい出てきてもそれに引つかかつて自分の生き方に絶望したり自殺を考えたりする。そういうことになりかねない生活を娑婆と云います。一言で云えば思うようにしたいが思うようにならないということです。高速道路の渋滞ということがあります。こういう喩えは自動車の運転をする人にとってはあまり芳しくない喩えかも知れませんが。高速道路は早く行くために出来たものですが、高速道路に入ったために渋滞して一般道よりも時間がかかる。そういうこともたまにあります。つまり、目的は自分ではつきりたてて行動しているつもりだが色々な障害があつて自分の思うようにならない。

これを仏教では「生・老・病・死」の四苦という。この生苦と云う生きるという字は、生活していく中で様々な障害がでてきて困るとか、住みにくいなどです。いつも私は喩えに出す、夏目漱石の『草枕』の始めに「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。とかくこの世は住みにくい。」と出てきます。理屈ばかり云っていれば角が立つ。さりとて人情ばかりで生きていけば流されてしまつて自分の主張がまつたく通らない。人の後ばかり着いてうろろしなくてはならない。とかくこの世は住みにくい。これは夏目漱石の『草枕』の云いたいことでしょう。夏目漱石は仏教にもご縁のあつた人です。真宗にはご縁がなかつたのですが、仏教にはありました。それで彼は「則天去私」ということを云います。天に則して私を去る。天とは中国人がたてた絶対という意味です。天命とか。「人事を尽くして天命を待つ」という言葉があります。天子は天命によつてこの世を治めるように王様になつたとも云う中国思想です。ですから中国思想では天とは宇宙の主宰者・最高神・絶対者ということですから、それを使って天命に則してとは、絶対の道理という風に転用しているわけです。人間のたてた理屈ではなくてどこに行つても通用する道理という風に則つて私を去る。「則天去私」。私とは私情です。自分の都合でものを考える。そういう私心をなくするということが私の人生の要点だということを夏目漱石は云うわけです。これは表は中国思想ですが背景には仏教があるように思います。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。とかくこの世は住みにくい。」というご自身の嘆きから、それがだんだん歳をとつて「則天

去私」という世界を会得されたのだと聞いております。私たちはそういうような道行きを歩んで来ているかということです。そういう道行きを歩んでいるかを考えた時に、とても「則天去私」というような自由な生き方をしていないのではないか。自分の思うようにしたいがどうにもならない。そういうことで眉毛の中に縦皺をよせて生きている。

私が教えを受けました曾我量深先生に「仏様の御影像や木像を見ると、ここに白毫光といわれる特別の相が描かれているのはどういわけですか」とお尋ねしましたところ、「眉と眉の間に縦皺がよらないということでしょう」と云われました。仏様は思うようにしたいが思うようにならないという世界をはるかに超えておられる。だから眉と眉の間に縦皺が寄らない方だということを表すためにここに白毫光が描かれているのだと。我々はその反対です。自分の顔は見たことがないものですが、人には愚かな姿を見せているのです。自分で顔を鏡に映す時は比較的冷静な時です。腹を立てたり悲しみの局に達している時は鏡を見ようという気持ちは起きませんから。自分がどんな愚かな顔をしているかは自分では見ていないのです。ところが人には見せているのです。そういう時はガラスの鏡は通用しないのです。仏様の本願という智慧の鏡によって自分自身を見せていただくのです。親鸞聖人の教えを易しく云えばこういことです。自分の愚かな姿に気づかせていただいて、自分の力で練りこんで、努力に努力を重ねて「則天去私」というような世界を会得した人もいるけれども、我々は到底夏目漱石のようにはできない。そういう愚かな私

が本願の力によって自分を照らしていただいている。自分自身は妄念、妄想の毎日の生活をして
いる。その愚かな私にちゃんと仏の大きなお用はたらきがとどいておっていただくのです。丁度、太陽
が私を照らして下さっているようなものであつて、また月が闇を照らして下さっているような
ものである。むしろそういう喩えを遙かに超えている光明ということを超日月光と教えていた
いています。日月を超えた光。つまりこの目で見える光ではなくて信心の眼で感ずる光の世界が
私のものになる。私のものになると云いますと物質的に聞こえますが、借り物ではないとい
うことです。自分に毎日毎日その世界が会得できるのは、お念仏のおかげだという事です。お念仏の
深い意義を教えてくださいました親鸞聖人や法然上人のおかげであるということですよ。

それで資料に、

「弥陀の名号となえつつ 信心まことにうるひとは 憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもいあり」

仏恩は「ぶつおん」ですが、上が「ぶつ」と詰まるので「とん」と読みます。仏のお恵みをあ
りがたくいただいて目覚めて生きる人間にさせていただく。これが報恩講の報恩の意味だと思
います。ところが蓮如上人は、知識的にそれは知っているけれども、その心がいつも新しく自覚さ
れずに、報恩講を年中行事のように勤めるだけでは報恩講の眞の意義にかなわない。そういう勤

め方をしている場合が非常に多いということを注意しておられます。

「聖人の恩徳はなにものにも比較できない極めて高く深く大きなおめぐみであり、この大恩を報謝する心を失ってしまったては、真宗門徒として目覚めて生きる意味がありません。

このような深いわけがあつて、毎年の旧例として七日間、特別のしょうじん莊嚴を整えて儀式を行い、報恩の為に最高のお勤めをいたします。」

本山では報恩講は十一月二十一日に始まつて二十八日に終わります。七日間昼夜お勤めをするから七昼夜といひます。これが詰まつて「おひっちゃ」となつたのです。報恩講のことを俗に「おひっちゃ」と云ひます。七昼夜といつて二十一日に始まつて二十八日まで報恩の御仏事を勤める慣わしになつております。

報恩の為に最高のお勤めをいたします。この七日間の報恩講には、全国各地から必ず門徒が参集してこの御法事を厳肅におつとめするならわしが今日までずっと続いていきます。

これは親鸞聖人がお亡くなりになつた後、末の娘の覚信尼公が大谷本廟のもとである聖人の御影を安置した小さな廟をお作りになつた。もちろん背後に關東の門弟の資力があつたわけですが、土地だけは覚信尼ご自身の所有地を全部親鸞聖人の御影堂の用地として寄進されました。これは単なるお墓ではなくお骨を埋葬した上にお堂を建ててその中心に親鸞聖人の御影（お姿）を安置

して、そこで聖人の教えを聴く集いをなされた。これが報恩講の始まりでございます。覚信尼の孫である覚如上人が本願寺を創られたときにこの御祖母さんから伝統したこの御仏事を中心にして、本願寺は報恩講教団として末永く親鸞聖人の御恩報謝の御仏事を勤めるということをお決めになり今日まで続いているわけであります。

大谷派のことを申しますと、最後の御満座に坂東節というお勤めがあります。普通しないお勤めがあります。『正信偈』のお勤めを船にのって身体を振ったようにするお勤めです。そうしますとお参りになつてゐる人が珍しいので立つのです。私が教導で本山に出ていました頃には「皆さん立たないで、お座りになつてお勤めを聴聞してください」と宗務役員が云つておりました。今は立つ人がいないと聞いております。報恩講で年に一回の特別なことが行われますと珍しいものを見ようという心が先にはたらいってしまうことがあります。そういうことで形だけで習俗的に勤めたのでは報恩講を勤めたことにはならないのだということ蓮如上人はここまでお書きになつてゐるわけです。

〈休憩〉

それではもうしばらく聞いていただきます。資料を見ていただきます。

「安心（あんじん）がまだはつきりしていない者には、御恩報謝の心が徹底する道理がありません。未安心（みあんじん）の者は、

この報恩講七日間に、

仏法の信心とはどういう信心なのか、

他力の信心とは、自己自身にとってどういう目覚めなのか、

本願念仏のはたらきでどのように自己自身が変革されるのか、

自分は果たして信心がえられているのか」

この「変革」という言葉に抵抗を感じるといふ人がありますが、「変わるのか」という意味です。本願念仏の用きでどのように自己自身が変わるのか、といった方がやわらかいでしょう。

「自分は果たして信心がえられているのか、よく聴聞して、法による目覚めが確実になることが何より大事であります。そして眞実信心が間違いなく定まったとき、はじめて宗祖親鸞聖人の御恩に報いることが出来るのであります。

悲しいことですが、私達は聖人がおなくなりになってから百年以上もあとに生まれたので」

これは蓮如上人がこの『御俗姓』を書かれた時は、親鸞聖人が亡くなられてからちようど二〇〇年になるので、何故二〇〇年と書かれなかったのか、ちよつと疑問ですが、やはり文章の調子が「二〇〇年」というよりも、「すでに一百余歳の星霜を送るといえども」と書いてた方が文章としてきれいであり勢いがあるから、実際数字の上では二〇〇年だったけれども、「すでに一百余歳の星霜を送るといえども」（『聖典』八五二頁）という具合に書いておられる。それで、

「私達は聖人がおなくなりになってから百年以上もあとに生まれたので、直接聖人にお目にかかってみ教えを聞くことはできません。しかし残されたお言葉によって私達がたすかってゆく道理としての教・行・信・証の意義を我が身の上にはつきりいただくことが出来ることは極めて尊く有り難いことであります。」

ここの所が非常に難しい所であり、また大事な所であります。それで「あんじん」という事は、「安心」という字ですが、普通の安心とは全然意味が違うわけです。「あんじん」というのは、心の依り処がはつきりして間違いない生き方ができるようになる、その依り処が定まることを「あ

んじん」というのです。

それで、一般の字引きにもそういう事がちよつと書いてあります。電子辞書（広辞苑）には「あんじん」という事について、

一、信仰により心を一緒にとどめて不動である事。

二番目は、弥陀の救いを信じて、一心に極樂往生を願う心。

それから三番目は、宗派の教法の根本眼目。

というような具合に、大体普通の意味が書いてあるのです。信仰により、「心を一緒にとどめて不動である事、弥陀の救いを信じて一心に極樂往生を願う心」とありますが、もつとはつきり云えば、浄土願生じやうどがんしやうしん心が確立すること。この浄土願生心が確立するという事をやさしく云うと、この娑婆の幸せは泡沫のものだ、あるようでないという事を知って浄土を願う心が確立することです。

具体的な例は、お名前を申し上げては甚だ恐縮だけでも、ダイエーのこのごろ亡くなった中内功さん。彼は大阪の主婦の店、小さな主婦の店から始めて、大きなダイエーを作りまして、球団までお持ちになった人ですけれども、晩年は大変な負債を背負ってご苦労されて亡くなりました。それから、この東京で言えば西武の堤さんも成功者であるように失敗者であると私は思います。お歳を召してから起訴されるとかいうようなことになった。殺人傷害事件のようなものではないけれども、経済上の罪というものを受けなければならぬ。安心がはつきりしないと、我々

のこの世の幸福が一応得られたようだけれどもまたそれが失われ、裏目に出る事もままある。大きな事はニュースに出るが中小企業の場合もああいう事は沢山あるでしょう。それで、どういふ所でその思うようにならなかつた事を乗り越えていくのかという問題です。それはその人その人、一人一人の問題でございます。この頃、生命科学者、柳沢桂子さんが『般若心経』を読み、その縁で悟りを得たという事をNHKが放送しておりました。私はまだその本を読んでいませんが、女性の科学者、その方が『般若心経』によつてその一切の執らわれから離れる、「色即是空 空即是色」という、「色即是空」というのは形あるものは皆実体がない、それだけではなくて、「空即是色」というのは実体がないという道理はすべてのものの上にあられるということ。「色即是空 空即是色」という事を悟つたというわけです。その話を私はちよつとNHKで聞きまして、中にはそういう人がおられる。科学者であっても科学にとらわれないうで仏法の道理に目が覚めたという人もいらつしやる。そういう人は珍しいです。

皆さんご承知の通り、お釈迦様の一代教の中で、三十五歳の時に悟りを開かれてから、八十歳で御入滅になるまで、涅槃に入られるまで、亡くなるまでの教えを一代教という。その一代の中で説かれた教え、一代教という多くの経の中で、最も短いお経が『般若心経』です。『阿弥陀経』より短い。この『般若心経』で分からない事が私にはあるわけです。それは何かというと最後の所に、「ギャテイ、ギャテイ、ハラギャテイ、ハラギャテイ、ハラソーギャテイ、ボジソワカ」（柳沢桂子訳「行

く者よ、行く者よ、彼岸に行く者よ、彼岸に完全に行く者よ、悟りよ、幸いあれ」という呪文がついている。何故、漢訳にあのようなインド語の呪文がついているのか私にははっきりうなづけません。とにかくそれは別として『般若心経』の「色即是空　空即是色」という事を悟られたというわけです。ところが、普通は中々そうはいかない。毎日毎日忙しいと云って、子供が寝ている内に家を出て子供が寝てから帰ってくるという人がほとんど大部分ではないですか。朝は暗い内に出て夜になってから、まあ会社に仕事だけではないんでしょうけど、会社の仕事で済んでから同僚と一緒に一杯飲む事も入っておられるのだろうけど、それもまた一つの仕事というか、社交が大事だという所でやっておられるのでしょうか。それから、私は企業に勤めた事がありませんけれども、大体、子供が寝ているうちに家を出て、寝てから帰ってくるという忙しい暮らしをしていると、簡単に『般若心経』を読んで悟るといわけにはいかない。大体企業というのは、金儲けの仕事でしょう。ですから儲かろうが損しようがそんなことは一切実体がないのだ、「色即是空」だと云っても始まらないわけです。とにかく儲からない事をしていても何もならない、そこ勤務していると考えがそうなっていく。利益の上がない事をしていても何もならない、そこで儲けるつもりで作った施設を赤字が出ると他に売ってしまうでしょう。簡保で作った宿などその一例です。そういう事ばかりやっていけば、安心がはつきりしなければならぬという問題からはなはだ遠くなっていくのです。だから、それは今の社会の一番弱い所です。それは別の言葉

で云うならば内面破壊です、外に形のあるものを、作り出して金儲けをするという事が価値ある事だとする大前提で動いているのですから。自分の内面にどのような人生の意義を納得するかという事は二の次三の次になるのです。そういう状況の中で、我々は不思議な事で真宗の教えにご縁があった。一年に一回なりともお勤めをして、法話を聞く時があるという事はそれはご縁があるという事です。それを自分でどう伸ばしていくのかという事は、これは自分の問題です。人さまがどれだけでもとよく聴聞しなくてはいけないと誘っても、忙しくてできないとか、お寺で座っているのが嫌だというような事になる場合が多い。

私も今鹿児島のお寺に五十年居ります。五十年も居たらよほど沢山の信者の方ができたらうと思われるだろうが、よく聴聞した人がだんだん亡くなってしまっているのです。今、農家は第二種兼業農家ばかりです、私のお寺の同朋もそうです。日曜でないと法事もできない。そういう方ばかりです。ウィークデイに法話会をしても集まるのは女性ばかりです。社会状態がそういう状態になってしまった。それでそういう時においても一人一人が皆、安心が大切だと。安心という事は自分の精神の完全におちつく所をはっきりさせてもらう。それが『般若心経』を読んで悟ることのできない我々凡人にもちゃんとそれができる道がある。それは念仏申す事。これが法然上人、親鸞聖人の教えの大事な所です。

「なむあみだぶつ」というのは一言ですから。これは一息の中に十声の念仏を称えるという事

は、乃至十念という事がお経にはあるけれども、一声でもよろしい。一声でもよろしいから、どんな事があってもそれが縁になって南無阿弥陀仏と称えると、仏が私にいつも目覚めて浄土を願えと用きかけて下さっている事が、「なむあみだぶつ」という言葉によつてはつきりする。言葉になった如来、言葉になった仏の用きはたらをいただいて、仏法の信心とはどういう信心なのか、他力の信心とは自己自身にとつてどういう目覚めなのか、本願念仏の用きでどのように自己自身がかかるのか、自分は果たして信心を得られているのか、という問題、この四力条、こんな事は蓮如上人の『御俗姓』には書いていないですが、私がかうかがった所ではこういう事です。『御俗姓』の中に、ただ一言、

「この砌において仏法の信・不信をあいたずね、これを聴聞して、まことの信心を決定すべくんば」
(『聖典』八五二頁)

と書いてある、それだけの事を四ヶ条に私は展開しました。単に文章をのばしたというのではありません。その内容を私がいただいた所をこのように展開したと思つて下さい。それでこの事を私がもう少し具体的に申し上げて今日のお話を終わりたいと思います。

これは私の師匠である曾我量深先生のお言葉で具体的なお話があるのです。それはどういう事

かと云いますと、新潟県の長岡に寝たきりのおばあさんがいらっしやつて、以前から曾我先生の話はずっと聴聞してこられたが寝たきりになったので、嫁さんに、近い所に曾我先生が来られるそうだが、あんた行って曾我先生の話を書き取って来て下さいと頼んだ。嫁さんは、私は聴聞が十分できていないからノートなんかできませんと云って断った。しかし嫁さんはその事が気になって、曾我先生の法座にお参りして、実は姑からこういう事を云われて来ましたが、私はノートする力がないので、姑のために真宗の教えをやさしく書いていただけませんかと曾我先生をお願いした。それで先生が三カ条書かれたのです。それは先生の十三回忌の時に出た、『鸞音抄』という本に出ています。

一つ、仏様とはどんな人であるか。我は南無阿弥陀仏と名のつておいでになります。

二つ、仏様はどこにいなさるか。仏様を念ずる人の前においでになります。

三つ、仏様を念ずるにはどのような方法がありますか。仏たすけましますと念じます。

だれでも、どこでも、いつでも、たやすく仏を念ずることができます。

昭和三十年九月十三日 曾我量深

これだけ書いて与えられた。

ところが、曾我先生がその後アメリカのロサンゼルスに行かれた。ロサンゼルスの別院の輪番さんの奥さんが同じ事を頼まれた。そしたら曾我先生は一番と二番は同じ事を書かれた。越後のおばあさんに対し与えられたものと同じ事を書かれたが、三番目は詳しく書いてある。それを読んでみましよう。

南無阿弥陀仏と一念疑いなく自力の計（はからい）をすてて、静かな心をもって、仏願わくばこの罪深き私をたすけましますと念ずるのであります。

これは誰でも、どこにいても、いつでも、悲しい場合でも、うれしい場合でも、たやすく仏を念ずることができるのである。

この念が現前する時、いかなる煩惱妄念がおそい来っても、内心の平和は絶対に破れません。これを真の救済と申します。

三番目にね、越後のおばあさんに書かれたものの方は、「仏様を念ずるにはどのような方法がありますか、仏、たすけましますと念じます」とこう書いてあられた部分をこれだけ長く詳しく具体的に書いて与えられた。

これは念仏と信心の関係です。「南無阿弥陀仏と一念疑いなく自力の計（はからい）をすてて、

静かな心をもって、仏の願わくばこの罪深き私をたすけましませと念ずるのであります。これは誰でも、どこにいても、いつでも、悲しい場合でも、うれしい場合でも、たやすく仏を念ずる事ができるのである。」つまりこれは難しい言葉では易行いぎょうという。易行の易とは難に対する易で、易しい。我々がいつでもどこでも、どういう心が動いた時にいつでもそれが御縁となつて称えることができる。念仏申すことは易行である。それが単なる易行だけではないのです。そのお念仏を深くいただいて私が目覚めるということが基本にあつてそれが難しいのです。難信という。易行難信、『教行信証』総序には、

「難信金剛の信樂は、疑いを除き証を獲しむる真理なりと。」（『聖典』一四九頁）

とあります。易行という事だけではないのです。念仏称える事が易しいということだけであれば真宗だつて浄土宗だつて同じですが、親鸞聖人の教えは難信という念仏一つで我々が目覚めた人間になるのがなかなか難しく、これ容易ならぬことだ、人生の一大事だと。その難なる事、極めて難しい事ができあがるということが我々一生の大問題、信心決定という事はそういう事です。そういう事を我々は聖人から教えていただいているのです。ですから、難というのはできにくいという事であつて、できないという事ではないのです。ポーツとしてではできないという事で

す。

やっぱりしよっちゅう自分の内面的に問題意識を持ってよく教えを聞かなければ「難信金剛の信樂」は得られないという事です。単なる易行ではない。念仏称えるという事は易しいという事だけではない。そういう事を蓮如上人がこの『御俗姓』でもおっしゃっておられるし、また『御俗姓』以前にちゃんと親鸞聖人がご一生の間に力を尽くして教えて下さったのだと私は思っています。これで終わります。

あとがき

本書は平成十七年十月三十日、第十五回報恩講における樸暁先生のご法話の記録です。

報恩講という法要について先生は「仏法の信心とはどういう信心なのか、他力の信心とは、自己自身にとってどういう目覚めなのか、本願念仏のはたらきでどのように自己自身が変革されるのか、自分は果たして信心がえられているのか、などをよく尋ね、よく聴聞して、法による目覚めが確実になることが何より大事である」と指摘され、「眞実信心が間違はなく定まったとき、はじめて宗祖親鸞聖人の御恩に報いることが出来るのである」と明瞭な言葉で著して下さいます。又、「報恩講中に、本願他力の意義を十分聞き開きて、ただ念仏一つで眞の目覚めが得られるという道理に身を挙げて納得出来たときに、始めてこの聖人の御正忌の本来の意義にかなうことになる」と、報恩講の本意にかなう法要として勤めなさいという、大切なご指摘をいただいております。その内実は非常に厳しいものであり、胸につまされることではありますが、常に心に留めていかなければと思います。

殺伐としたニュースが連日のように飛び込んでくる今日、人間はどこに向かい、何を依り処として生きているのか、そういう問いを保持していくことが大事であると思います。先生は本書で「仏様の本願という智慧の鏡によって自分自身を見せていただく」と語られています。自己を映

す鏡を持つこと、その鏡は本願であることを教示して下さいます。親鸞聖人という人は、本願に真向かい、本願に生きられた人です。我々凡夫が目覚めて生きていく唯一の道を「念仏申す事」と諦かにして下さいます。親鸞聖人の歩みを通して本願念仏の深い世界を味わっていききたいと思えます。

先生には毎月当寺の会座でのご教化、並びに報恩講のご出講に深謝致します。また、ご多忙の中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、及び池田江美子様には、お役を快くお引き受け下さり感謝申し上げます。

合掌

平成十八年十月二十二日

第十六回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎